

論文要旨

学位論文題目 継続的な文字チャットによる日本語学習者の情報の伝達に関わる言語表現の変化

氏名 船戸はるな

本研究では、同期性が高く、双方向性のあるコミュニケーションであることから、情報の伝達に関わる言語表現が多く使用される文字チャットに注目し、JFL環境で日本語を学ぶ学習者の、情報を伝達する側の言語行動、情報を受け取る側の言語行動の双方の観点から分析を行った。

情報を伝達する側の言語行動の分析においては、終助詞「ね」、そして直接形/間接形に注目して分析を行った。情報を受け取る側の言語行動の分析においては、相づちに注目して分析を行った。

本研究の調査資料は、学習者と母語話者1人ずつをペアとしたチャットログと音声会話の文字起こし資料である。チャットについては、1週間に1回1時間のチャットを12週間継続したログである。音声会話はインターネット電話サービスであるskypeを介した約15分の短い会話であり、チャットの1、6、12回目と同日に記録したものである。

研究1では、日本語学習者の終助詞「ね」の使用の特徴と、その変化を分析した。その結果、まず学習者の特徴として、①母語話者に比べ「ね」の使用頻度がかなり低い、②任意の「ね」（話し手の領域に属する情報を述べる際の「ね」）が多く、またその適切/不適切の判断は正しく行われていない、③必須の「ね」（聞き手の領域に属する情報に付加される「ね」）の非用が多い、という3点が明らかになった。この特徴は、母語話者との継続的なチャットによって変化し、①「ね」の使用頻度、特に必須の「ね」の増加、②必須の「ね」の非用の減少が見られたことから、「ね」の適切な使用に近づいているといえる変化が明らかになった。

研究2では、日本語学習者の「ね」と「よ」の混用の実態と、その変化を分析した。その結果、学習者は情報が話し手のなわ張りのみに属する場合（領域A）に「ね」と「よ」の使い分けが困難であることが明らかになり、さらに、学習者の「ね」の誤用とは、「よ」との混用の結果である可能性が高いといえることがわかった。また、母語話者とのチャット継続後も、領域Aにおける「ね」と「よ」の使い分けには改善は見られなかった。この原因としては、この領域における「ね」の使用の規則が複雑であり、かつ母語話者があまり使用しない用法であるため、十分なインプットを受けることができなかったことが考えられる。

研究3では、日本語学習者の直接形/間接形の使用の特徴と、その変化を分析した。その結果、学習者は間接形の誤用は少ない一方、直接形の誤用が多いことが明らかになった。また、母語話者の場合、形式としては直接形をとっていても、語尾を曖昧に言いさしたり、確かさの度合いを低める副詞を使用したりすることにより、可能な限り直接形を避ける傾向が確認された。本稿ではそのような言いさしや副詞を使用した形式を「準間接形」とし、直接形と区別して分析を行うことによって、母語話者の特徴をより顕著に示すことができた。また母語話者とのチャット継続後、学習者の直接形の誤用は大幅に減少し、また、直接形と間接形のいずれも使用できる場合に間接形を使用する頻度が高くなったことが確認された。

研究4では、日本語学習者の相づちの使用の特徴と、その変化を分析した。その結果、チャット開始前の学習者は、①母語話者に比べ学習者は相づちの頻度が少ない、②母語話者は1つの発話の中で複数の相づちを組み合わせる使用することが多いのに対し学習者は1つの相づちを単独で使用する使用が多い、③学習者は「笑い」「記号のみによる相づち」等の言語的負担の少ない相づちを多用し、「意見・感想」を表わす相づちが少ない、という3点が明らかになった。母語話者とのチャット継続後、相づちの使用頻度は増加し、また、相づちを単独で使用する傾向は減少した。更に、言語的負担の少ない相づちは半減し、「意見・感想」を表す相づちが増加している傾向が見られた。

研究5では、音声会話の文字起こし資料を対象に研究1~4と同様の分析を行い、継続的なチャット後、音声会話において、学習者の情報の伝達に関わる言語表現に変化が見られるかどうかを明らかにすることを目的とし、分析を行った。その結果、終助詞「ね」の使用については、チャットと異なる変化として、誤用の増加が見られたが、チャットと共通の変化としては、使用頻度が増加し、必須の「ね」の増加、そして、必須の「ね」の非用が減少した。このことから、誤用の「ね」については課題が残るものの、必須要素の「ね」の使用には大きな向上が見られたといえる結果となった。

終助詞「ね」「よ」の混用については、チャット同様、あまり変化は見られなかった。「ね」「よ」の混用が起りやすい（「よ」の誤用が起りやすい）領域A（情報が話し手のなわ張りのみに属する場合）における母語話者の「ね」の使用は少なく、適切な使い分けの例に触れることが少なかったためである可能性が示唆された。

直接形/間接形の使用については、チャット同様、間接形の誤用にはあまり変化は見られなかったが、直接形の誤用の減少と、これに伴う間接形の正用の増加が見られ、学習者は直接形と間接形の8割近くを適切に使い分けられるようになっていた。

最後に相づちの使用については、チャットと同様、使用頻度の増加、また、発言1回あたりの相づちの使用数の増加が見られ、複数の相づちを併用するように変化した。また、表現形式としては、「意見・感想」が増加していく傾向が見られ、話し手から伝達された情報に対する「態度」を示すことができる相づちが増加していた。

このように、母語話者とのチャットを継続することによって、終助詞「ね」、直接/間接形、相づちのいずれも、適切な使用に近づく変化を示していることが明らかになった。

誰でも、どこでも利用しやすいチャットによって、日常生活において日本語でコミュニケーションを行う機会の少ないJFL環境の学習者の情報の伝達に関わる言語表現が向上できることを明らかにできた意義は大きいといえるだろう。